



カロリーネ・フォン・ヴォルツオーゲンの家族物語：
『アグネス・フォン・リーリエン』考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星野, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006152

カロリーネ・フォン・ヴォルツオーゲンの家族物語

——『アグネス・フォン・リーリエン』考

星野純子

(1)

カロリーネ・フォン・ヴォルツオーゲン (1763-1847) の『アグネス・フォン・リーリエン』は最初匿名で1796年から97年にかけて、シラーの『ホーレン』誌に連載された。『ホーレン』の読者獲得のために連載小説を必要としていたシラーは妻シャーロッテの姉であるカロリーネに、書きかけていた小説を見せられ、彼女を励まして完成させたのだった。

反響は非常によく、好意的に受け入れられ、女性作家が匿名で発表した時にはよくあるように、作者はゲーテだとか、ヤコービ兄弟だとか、あるいはシラーの手が加えられているのだとか、様々な憶測を呼んだ。その後、これもシラーの尽力で、ベルリンのウンガー書店から、第一部430頁、第二部390頁の二巻本として出版された (1798年)。

彼女はこの後も、7編の短編——単発的に雑誌に掲載されたのが1826/27年に物語集として二巻本にまとめられる——と、長編小説『コルデーリア』(1840年)を書いている。これらはすべて「『アグネス・フォン・リーリエン』の作者による」として発表されたが、いずれも第一作の評判には及ばなかった。彼女のその後の文学上の名声はシラーの伝記(『シラーの生涯』1830)を出したことによる。彼女はシラーをほとんど神格化して描き、国民的詩人シラーという時代風潮に受け入れられ、この書のみはその後も版を重ねた。死後出版された『文学遺稿』2巻(1848-49)も好評だったが、人々の関心はカロリーネ自身の省察などよりは、彼女が伝えるワイマール古典文化の多彩な人物との交流の証言にあった。

『アグネス・フォン・リーリエン』(以下、『アグネス』と略記)は、田舎で育った無垢な少女が都会へ出て行き、宮廷の陰謀や腐敗に巻き込まれながら、自分の純真な心を護り抜き、幸せな結婚に至るといふ枠組みの中にヒロインの魂の成長を織り込んだ物語である。しかし例えば、ゾフィー・フォン・ラロッシュの『シュテルンハイム嬢物語』は同じような枠組みをとりながらも、ヒロインは逆境にあって自力で道を切り開き、自分に相応しい対等な相手と結ばれて模範的な家族を作り上げる物語であった。ところが孤児として育てられたアグネスは、実はお姫さまであったことがわかり、情愛深い養父と実父に守られ、ほとんど父のような年齢の恋人と結ばれるのである。どちらも旧来の冒険小説の枠組みを借りて筋を展開させながら、重点はヒロインの魂の発展の描写においていることに変わりはない。しかし彼女たちが身を落ち着ける外的世界は全く異なったものになっている。ゾフィー・フォン・シュテルンハイムが物語の最後に築きあげた世界は「女性的ユートピア」ともいえる独自の世界であった。¹ それに対して、アグネスの愛と結婚は最初から最後まで、男性に主導された秩序の中を動いていく。この差異には二人の作者の出自や個性の相違だけでなく『シュテルンハイム』(1771)

(23)

から『アグネス』(1798)に至る二十数年の社会の変化をも読みとらねばならないだろう。隣国フランスでは革命は王殺し(1793)と父殺しを経て市民による新たな家族像を再建しつつあった。² 同じ時に、孤児アグネスはこれとは違った別の家族物語を紡ぎ出す。アグネスの愛は、両親の世代の、専制的な君主の恣意に支配された領邦国家が、君主の病死により慈悲と理性ある存在に自然的に移行することによって実現され、アグネスの物語は情愛ある家父長制の再編成に組み込まれているのである。³

(2)

この物語は主筋と脇筋が複雑に絡み合い、錯綜しているので、まずはじめになるべく外的な事件だけを追って物語の枠を整理しておく。

舞台はどことも明示されないがドイツのとある侯国である。君主はもうかなり高齢だが、腹心の陰険な大臣に助けられ、居城都市Dに住み専横をふるっている。もういい年をした息子の公子や公女たちも彼を恐れて彼のいいなりである、ということが話しの中でわかってくる。

アグネスはその中の一地方ホーエンフェルスで、年老いた牧師の養女として育てられるが、養父も彼女の素性については何も知らない。アグネスが18歳になった晩秋のある嵐の夜、見知らぬ旅人が牧師館に一夜の宿を求める。アグネスはこのノルトハイムに恋をするのだが、彼はこの時既に40代、アグネスの父と言ってもいい年齢である。

さて、翌日ノルトハイムを迎えに現れたアマーリエ・フォン・ヴィルデンフェルス伯爵夫人の存在にアグネスは不安と疑念を抱く。しかし養父はやがて、この伯爵夫人に娘を託すことにする。父の家を離れる前にアグネスは家政婦から、実はノルトハイムが養父にアグネスへの求婚をしていたという話を打ち明けられ、将来への希望を抱いて、Dへと出立する。

アマーリエの館に住み、宮廷とかかわるようになった彼女はやがて、エリーゼと友情を結び、彼女の婚約者の弟、ユーリウス・フォン・アルバンはアグネスに思いを寄せるようになる。しかし彼女はそれには眼もくれず、経済的自立を願って肖像画家としての修業をする決心をかためる。Dへの途上で知り合ったヨハネス・チャールズという旅の画家がやがてDに現れて絵画の教師となり、その手引きで彼女は初めて、ひそかに母と会うことができる。薄暗がりの中で母の顔はしかとはわからないが、母は、公表できる時がくるまで注意深く隠しておくようにと指示する。仮装舞踏会に戻ったアグネスのどった怪しげな素振りのために、ノルトハイムは彼女とユーリウスとの仲を疑う。

アマーリエと共にアグネスはノルトハイムの領地へ招待され、やがてエリーゼとアルバン兄弟もそれに加わる。ユーリウスはアグネスに愛を告白するが彼女は拒み、ノルトハイムへの愛を打ち明ける。ユーリウスは潔く自分の立場を受け入れ、以後はアグネスに真摯な友情をつくす。真夜中にこっそりとチャールズに母への手紙を託すために出かけたアグネスは、その帰り、暗闇の中で急にあけられたドアにぶつかり気を失う。そこはユーリウスの部屋だったが、そこを出たところで、ノルトハイムと鉢合わせ、またまた彼の疑惑を招く。しかし翌日、アグネスはノルトハイムに申し開きをして、ユーリウスへの愛を否定する。誤解が解けて互いの高潔な人格を認め合った二人の男性とアグネスの三人は友情の絆を結ぶ。ノルトハイムの領地で彼女は、ベッティーナとバティスタという姉弟と知り合い、ベッティーナはアグネスにひきとられてDに行くことになる。彼等の母親のエミーレも何か秘密をも

った不思議な存在である。

Dに戻ったアグネスは、公子が催した夜会でその妹の公女に会い強い印象を受ける。ノルトハイムの愛が確信できないアグネスはにぎやかな宮廷生活にあってもひとり孤独を感じながら日を送る。そうこうするうちにエリーゼはアルバンと結婚、その席で、公子は君主と一緒にアグネスにユーリウスとの結婚を勧める。彼女がこれを拒否したため、君主は激怒する。アマーリエやノルトハイムまでこの結婚を勧めるため、怒りと失望のあまり気を失いそうになったアグネスを人々は馬車で連れ帰る。翌日失意のアグネスのもとを訪れたチャールズはやさしく彼女を慰め、母との二度目の会見の計画を伝える。

激しい嵐の中を待ち合わせの市門へと向かうアグネスを、偶然姿を見かけて不安を覚えたノルトハイムが跡をつける。チャールズはこの追跡に気づき、馬車をとめて、とある旅籠に入る。部屋にこもる二人の仲を誤解したノルトハイムはアグネス救出のため部屋に侵入し、あわやチャールズとピストルで決闘かという事態に陥る。アグネスは彼の誤解をとき、ノルトハイムに愛を告白、彼もアグネスへの愛を打ち明け、初めて二人は相互の愛を確認できたのである。ノルトハイムとチャールズも和解する。

ところが母のいる館に着いたところで、二人は襲撃を受け、チャールズはピストルで撃たれ、アグネスは拉致、監禁されて気を失う。意識の戻ったアグネスは、自分が熱のために一週間昏睡状態に陥っていたことを知る。アグネスが親切な医者に見て世話をされて徐々に健康を取り戻していくところで第一部はおわる。

監禁中のアグネスは、こっそりと公子に導かれて母との二度目の会見を果たす。そこで彼女は、公女こそが母であること、チャールズが父であり、実はホーエンフェルスの領主で、君主に追われて領地を捨てて放浪していたこと、今また彼の手に入れられた身になっていることなどを知る。彼女は母にノルトハイムへの愛を打ち明ける。別れ際に母は自分の半生を綴った手記と、公子が自分に宛てた二通の手紙をアグネスに手渡す。

この120頁にわたる手記と二通の手紙を読むことで、アグネスの素性とこの間の監禁に至るまでの事情が明らかになる。公女は父の勧める結婚に反抗してホーエンフェルスと秘密に結婚していた。それを知った父は彼を追放、やがて生まれたアグネスもすぐに死亡したとして、秘密裏に里子に出される。しかしノルトハイムの父親（彼はホーエンフェルスの親友だった）が偶然立ち寄った貧しい農家で子供を見つけて引き取り、牧師に委ねたのだった。君主は年老いた現在も相変わらず娘の不服従に立腹していて、宮廷に現れたアグネスの秘密を知ると侯爵家の名誉をまもるため、彼女を大臣の甥である、ホーエンフェルス現領主ザルムの息子と結婚させて国外に追いやるという計画をたて、アグネスを誘拐させ、彼の狩猟用別荘に監禁させたのである。これを知った公子はホーエンフェルスの身の安全のためにも父を刺激せぬ方がよいと考え、以前の、ユーリウスとアグネスを結婚させてイギリスに派遣するという計画を実現させようとする。

読み終えたアグネスは苦しむが、自分のすべての幸福を両親の平安のためには犠牲にしようと考えて落ち着いた気分になり眠り込む。

監視の目をかいくぐって男装したベッティーナが現れ、アグネス救出の計画を伝えるが、彼女は父の安全のために、自分が救出されることを拒む。そこでノルトハイムは例の親切な医師の仲介で直接

に説得を試み、その夜、彼と共にエリーゼのところへ行くことに同意させる。ところがこの夜、君主、公子、公女が別荘に現れアグネスと会見し、君主自身もアグネスをエリーゼのもとに行かせることに同意、大臣さえこれに積極的に賛成するのにアグネスは少しいぶかしさを感じながらもこれに従う。

アグネスはしばらくエリーゼの婚家、アルバンの領地で静かな生活を送る。その間にアマリエが来訪し、彼女の半生や、夫の生存とエミーレが夫の愛人であったことが判明したことなどをアグネスに語る。後にアマリエは夫を訪ねて、仲立ちをしてくれる友人のいるスイスへ旅立つ。

政治情勢の変化でノルトハイムが外交交渉の任にあたるため、半年間外国に行くことになる。彼は出発前にアグネスと結婚したいと思うが、君主を恐れる公子と公女に大胆すぎるととめられ、決断を委ねられたアグネスもノルトハイムの公の仕事のためには我慢する決心をする。

この間アグネスの知らないところで、彼女とユーリウスとの結婚話が再燃している。これは大臣の策謀によるもので、彼はホーエンフェルスがノルトハイムと結びつくことで侯国の体制が揺るがされるのをおそれ、二人が結婚すればホーエンフェルスを一生監禁すると宣言したのである。ユーリウスは苦悩し、怒り、事態打開のために病をおして駆けずり回る。

終にアグネスは君主の別荘でユーリウスとの結婚式を強行されそうになる。ところがあわやというところで、現れたのは例の医者だった。実は早くから彼らの間でホーエンフェルス解放の計画は練られていたのが成功したのだった。

しかし病の床についている老君主の心の平安を妨げるのを恐れ、ホーエンフェルス釈放のことは伏せて、アグネスはしばらく休養のためにスイスへ旅にでることを願い出て許される。自由になった父とともにスイスへ向かう旅の途中で、アグネスは君主の訃報を受け取り、二人は帰郷の途につく。ところがそれまで時々届いていたノルトハイムからの消息がぷつぷつ途絶え、アグネスは非常な不安に駆られる。そんな彼女を父が連れて行ったのはホーエンフェルスの牧師館で、そこで待ち受けていたのは、養父とノルトハイムだった。彼女は恋人から、大臣は辞任、アルバン兄弟が後任を引き受け、ホーエンフェルスの領地は回復されたことを知る。すべての障害がなくなった二人は、アグネスの願いで、この思い出の部屋でその日のうちに婚礼を挙げたのだった。

以上の事件展開を見る限りでは、モチーフはすべて伝統的な冒険物語のパターンに則ったものばかりである。誤解に基づく恋人たちの離反、秘密結婚、男女の愛が実は肉親愛だったことが判明したり（公子は最初、姪と知らずにアグネスに言い寄っていた）、死んだと思われていた人が実は生きていたり、登場人物の多くが血のつながりがあることがわかったり、追跡や誘拐、拉致や監禁、隠し扉や秘密の小箱と、古い物語を成り立たせていた道具立てはすべて利用されている。

第一部ではすべてはアグネスの1人称による回想であるが、彼女はすべてを知った現在の立場から語るのではなく、過去の自分を追体験しながら語っているため、無数の謎や疑惑は次々と重ねられるばかりである。ホーエンフェルス領主の謎の失踪、アグネスに親身の指導をするチャールズの不思議な存在、アマリエの部屋に掲げられたノルトハイムの画像や彼の指輪でかき立てられる二人の仲についての疑惑、彼らのあいだにかわされる謎めいたせりふ、親子と名乗れない母の秘密とは何なのか、ベッティーナ母娘の謎、アグネスに手渡される不思議な小箱、何故アグネスは公子に見せられた公女の肖像画に驚くのか、また夜会での公女の姿に強い印象をうけるのはどうしてなのか、チャールズがノルトハイムにホーエンフェルスについて言及するのはなぜなのか、等々、思わせぶりのほめかし

や、謎かけはすぐにはぐらかされて、話は先に進み、読者は混乱させられ、じらされる。しかしこれは架空の空想的なお話を語る時に聞き手の興味を引きつけるためにとられる常套手段であり、これらの謎はすべて第二部で解明される。

大部分の謎と秘密は、まず『公女の手記』と公子から公女宛の二通の手紙をアグネスが読むことで、次いでアマーリエがアグネスに自分の半生を語ることで、明らかになる。しかし話は幾度も同じ時点から新たに始められるため、読者は全体の関連をはっきりさせるためには、幾度もさかのぼって自分で物語を構成し直さねばならない。それで筋は非常に錯綜しているように見えるのだが、整理してみると全体の大枠事体は複雑なものではない。単純化すれば、第一部は二人が愛を確認するまでのプロセスがそれを妨げ遅延させる筋との絡み合いで構成され、第二部では二人が結婚という制度に至るためのプロセスがこれを妨げる筋の絡み合いで展開されるといえるだろう。

(3)

さてそれでは、愛の確認や結婚が妨げられ、かくも長々と引き延ばされねばならないのは何故だろうか。もちろんそれはヒロインの内的成長の過程を描くためである。

社会的、政治的に激動の時代であった18世紀末はまた新しい男女の秩序が模索された時代でもあった。女性性や男性性の理念についての熟考が重ねられていく中で、女性は男性の対存在として、愛という理念に則って自分を形作ることが要請されてきた。⁴ アグネスもノルトハイムにふさわしい愛の形を体得して自己形成し、結婚という制度に入っていくのだが、ここではそれが一貫して「父」の指導によってなされる。

アグネスは彼女の生まれ育った環境を描写し、父の存在の大きさを強調して物語を始める。彼女にとって養父の存在は絶対的なものであり、ノルトハイムが現れたときもずっと、アグネスは父の視線で彼を見ている。父が彼と哲学や村の学校での古典語教育や村の啓蒙的改革などを話題にするのを傍らで聞き、「父がノルトハイムの判断を敬い、精神の生き生きとした興味のためにノルトハイムの表情に様々な美しさや優雅さが広がるのをみて」(1-36) アグネスは喜ぶ。父と恋人の精神的親近性を確認出来たからこそ、アグネスは愛を父から恋人に移すことができるのである。また、牧師が語る18年前の領主失踪の話にノルトハイムがなぜか非常な関心を寄せるのをアグネスが嬉しく思うのも、恋人と実父の内的結びつきを暗示して後の筋の伏線となるからである。ノルトハイムへのアグネスの愛を知ったチャールスは、「彼の態度にはなんとという偉大さと堅実さがあることか。人格の力から発する真の勇気、危険にあって示される思慮深さと明晰な眼差しはいつも男性の栄誉だ」(1-417)と、彼の人物を絶賛する。アグネスの愛の対象選択の正しさは実父からも承認されるのである。

アグネスの感情の中で父親像は絶対的であるのに、恋人の愛はまだ不確かだから、彼女は絶えず不安をおぼえる。以後、彼女は彼の愛を疑うとき、慰めを求めて父に向かい(1-85)、養父との過去の平和な追憶へ逃げ込んで、恋人はあきらめて父と共に生きようと考えたり(1-339)、恋人に拒否されるとチャールズを頼る(1-377)。ユーリウスとの仲を疑われた時にも、誤解を解くために持ち出されるのは父の存在で、「あなたがたとえ私を信用できないと思われるとしても、ホーエンフェルスの父(養父)の思い出を助けに呼ぶことはできないでしょうか。父に世話されて形成された心情においては、

正義や善に対する力がそんなにも早くなくなってしまうのでしょうか」(1-310)と言う。まるでアグネスはノルトハイムとは直接には向かいあえないかのようなのである。また二人の父親はその都度、アグネスを単に慰めるだけではない。もっと積極的に彼らはアグネスを正しい道へと導こうとし、彼女はただ、父を通して自分を理解し、自己形成しようとするのである。

その正しい道とは、アグネスの愛においてエロスを浄化し、自己喪失を招くような情熱の惑乱を抑え、内面の平安と調和を保持することである。

彼女のエロスの目覚めは父親の権威との関わりと平行して進んでいく。嵐の夜、ザルムの息子や娘たちと目隠し遊びをするアグネスは、ノルトハイムが自分のすらっとした姿態を好感をもって眺めているのに非常な満足を覚え、彼も遊びに誘ってはしゃぎまわる。ところがすぐにそんな自分に罪の意識を感じ「父にも私はよくそんな風にかかったりはしゃいだりしたものだ」と父との関係にかこつけて弁解する。そもそも彼女の「彼は私が自分の女らしさのすべてを感じた最初の男性だった。彼に触れて私の神経はふるえた。」という感覚は、「私は感覚も想像力も最高の清らかさにおいて育てられた」、「気高い神聖さが彼の存在のまわりにはただよい、それが私の胸をぞっとするほどしめつけた」、「存在と精神が全能の響きの中で一つになる愛」、「しとやかに育てられた少女の胸の愛の喜びをヴェールで覆ってくれる甘美で神秘的な薄明かり」(1-59f)と、ある種の宗教的神秘的な語彙にずらして表現されていたことから明らかなように、当初から無意識のうちに、エロスや官能性を見ようとしな方向へと動いてはいた。父たちはその規範をさらに強め、意識的にエロスを浄化し、情熱を鎮静すべきだと指導する。ノルトハイムの出立で落ち込む娘を散歩に連れ出した養父は、丘に登って『ホメロス』のアンドロマックの嘆きを朗読しはじめる。するとアグネスの心は父のやさしさと読書によるカタルシスによって浄化され、「私の心はアンドロマックの悲しみにかき乱され、その後、私の魂は高められた生の流れにより洗われたような純粋なものになった。…私の心は愛した。しかし私は純潔に愛した。私の憧れは静かでやさしかった。…愛は私にとって病いであることをやめた」と激しい情動を統御することを学ぶのである。

また、チャールズも、「…お前の本質は愛と共感である。喜びはお前にとってはただ心の純粋な情調の中でのみ見出し得るのだ。だから外的形象を人生の最高の幸福として描いてみせるような錯誤からは早く自由になりなさい。…心情の中では地上的形象も統御できるのだから。…お前を純粋な決して曇ることのない魂の平安の中に保持することが私に出来るならば、どのような苦しみも私は運命の善意として感謝して敬おう」(1-379f)と、純粋な内面性の中で得られる自由をアグネスに説き、古典主義的な清澄な境地に彼女を導こうとする。

アグネスがアマーリエの成熟した女性としての魅力に対抗意識を燃やした時にも彼女を引き止めるのは父の存在である。彼女は「…青い絹のスカーフをぞんざいに結び、普段の白い部屋着の上にショールを引っ掛け、体をぴったりと包み、胸と腕だけを軽く美しい襷でおおうようにして」つれない美女を装おうとする。ところがノルトハイムが父の消息をやさしく問いかけると「…この貴い名前を聞いただけで私は自分が青春の喜ばしいこだわりなさの中にいるのを感じた」(1-195f)とたちどころに父の規範の中へと戻っていくのである。

恋人ノルトハイムも、結婚にふさわしい女性の特徴をアグネスに教える。彼は城館に掛けられた先祖の肖像画を見せながら、ノルトハイム家の歴史を語る。彼の一族は代々領邦国家の重職についてき

たが、この伝統は祖父と父の代で終る。それは彼らに能力がなかったからではなく、フランスの影響による統治のやり方に不満をおぼえたからで、祖父は領地に退き、よき領主としての義務をはたすのに専念したのだという。祖母と母も夫を助ける理想的な女性として紹介し、さらにノルトハイムは「そのやさしい調和において、古代の芸術家に息づいているような、あの無限性の予感へとわれわれを導いてくれるような、愛らしい姿に会うことが出来れば何と幸福だろう」(1-236)と、人類の黄金時代への憧れを女性に投影する。これはシラーやフンボルトが組み立てた女性性理念の忠実なパラフレーズと言えるだろう。⁵

さらにこの三人の情愛ある父の上に立つもう一人の父、つまり祖父の君主はどうだろう。彼は娘ばかりか孫娘の幸福を妨げ、絶対的な権力をふるう無慈悲な暴君である。身分や階級、家の名誉などが第一で、「動機が心 (Herz) に求められるようなあらゆる行動は視野の外に」(2-168)あり、ノルトハイムが結婚に際してアグネスの出自を問題にしないと言うことがそもそも彼には理解できない。この頑迷固陋な君主の旧体制に対して、「心 (Herz)」により行動するノルトハイムは不法な抑圧には自由の理念をもって立ち向かう新しい世代であり、ただ一人君主をも恐れず、彼と直談判してアグネスを守ろうとする。ところがこの彼もアグネスもさらにホーエンフェルスも、君主と彼の権威を公然とは否定しない。彼はアグネスの祖父であり、国の正当な支配者だから、あからさまに反抗することは自然の絆と国家の基礎を破壊することになる。それをよしとしないアグネスは、彼も基本的には善良な人物なのだが、宮廷の悪習と取り巻き連に歪められているのだと理解を示し、彼の足もとにひざまずき、彼の許しなしにはノルトハイムと結婚しないと誓うのである。三人の父に従順なアグネスは国の父にも恭順なのである。

こうして、育ての父の絶対化で始まり、二人の父と恋人の間を振り子のように行き来して愛の形を整えてきたアグネスは最後に三人の情愛深い父という「聖なる三位一体」⁶に囲まれて物語を完成するのである。「…今や明かりが彼らの上に落ちた——そして私はノルトハイムと養父の腕のなかにいた。…よろめきながら私はノルトハイムの腕の中に沈み込み、父を胸に押しつけた。そして調和の中に溶解して、私の意識は愛の果てしない喜びの中で次第に消えていった…」(1-380)。専制的な父の権威は情愛あるものへと移行してはいるが、権威が「父」に具現されていることに変わりはない。アグネスの成長とは、この家父長制秩序へ編入されるに値する存在になるために父の規範を内面化するプロセスなのである。

(4)

ところでこのように、全体の枠組みは明解で、叙述の方法も単純であるのに、その間にはさまれる圧倒的な量の自己省察や内面分析や感情描写などは単にくどくてながながしいだけでなく、表現自体が非常にわかりにくいものである。しかし明解に語られる物語部分は現実離れた絵空事の感じがあるのに、省察部分こそが実は作者が書きたかったことでありながら、何かがうまく表現できていないのではないか、彼女の実感をどこか隠し、ずらし、ごまかしながら、アグネスがひたすらに秩序規範を内面化していく物語を作り上げようとしているのではないか、という印象をうけるのである。それはわれわれが既に作者カロリーネの実人生を知り、回想や手紙などによる彼女の表現を読むことがで

きるからなのかもしれない。⁷

彼女の父、カール・クリストフ・フォン・レンゲフェルトはルードルシュタットの狩猟長官で46歳のときに18歳のルイーゼ・フォン・ヴルムと結婚した。その長女がカロリーネで、三歳年下の妹が後にシラーの妻になったシャルロッテである。父は29歳のときに病気のため右腕と左足が麻痺するという障害をもっていたが、教養もあり意志も強く、義務を忠実に果たす高潔な人格であった。カロリーネは父から豊かな愛と教育を受けて読書好きな少女に成長した。しかしこの幸福は長くは続かず、13歳で父がなくなるとたちまち一家は非常な経済的困窮に陥った。レンゲフェルトは領地をもたず、結婚時にワイマールのシュタイン夫人の夫からハイゼンホーフを借りて住んでいたのだが、地代を払えない未亡人はここを明け渡さざるをえなかったのである。まだ若い母親は経済観念の乏しい人でそんな状況でも気晴らしのために娘を連れて旅行してまわったりして、夫の残したものをほとんど浪費してしまい、すぐにわずかの寡婦年金しか残らなかった。だから24歳のフリードリッヒ・フォン・ボイルヴィッツ男爵が16歳のカロリーネに求婚したのは母としては願ってもない僥倖だった。彼はルードルシュタットの名家の出で、財産もあり有能で野心的だが温和で信頼できる人物だった。母親も彼女はまだ若すぎるとは思ったので、とりあえず婚約させ、結婚すればボイルヴィッツの広い邸宅に母と妹も一緒に住み、ロッテはワイマール宮廷の女官として身を立てさせるという計画をたてた。そのためにはフランス語をマスターしておく必要があり、ボイルヴィッツはこの母の要望にこたえて自分の出張に母娘三人を伴い、ジュネーヴ近郊で一年間すごした。この旅行の生活はカロリーネにとっては非常に刺激的で実り豊かな体験だったが、ボイルヴィッツとの性格の相違を日々痛感し、帰郷すれば待っている結婚が彼女の心に重くのしかかる。彼女はこの時、「冷たいジュネーヴ湖での水浴がたたって」顔が痙攣したという。恐らくこれは心因性のもので、その後も長くこれに悩まされている。

帰郷後1784年に21歳で結婚するが、当初は生活もあまり変化はなく、母と妹はボイルヴィッツ家の階下に住まいをもち、彼女はこれまでと同様に読書や交友で日を過ごした。特にカロリーネ・フォン・ダッヘレーデン（愛称リー、後にヴィルヘルム・フォン・フンボルトと結婚）と友情を結び、従兄のヴィルヘルム・フォン・ヴォルツォーゲンとは親密な手紙の交換を続けた。しかし、夫とは肉体的にも精神的にも次第に距離をとるようになっていったらしい。

1787年の秋に従兄は友人のシラーを姉妹たちのもとに連れてくる。翌年の夏、シラーはほとんど毎日姉妹たちと親密な交際を重ね、手紙を交換している。シラーは結局、知的才能に恵まれ繊細な神経のカロリーネより、控え目でおとなしく愛らしいシャルロッテを選ぶが、婚約時代に彼は「私は今や心の中で幾度も将来の風景を思い描いてみる。われわれの生活が始まり、私は今と同じように物を書いているが、部屋には君たちがいるのがわかっている。カロリーネ、君はピアノに向かいロッテは君の傍らで仕事をしている。私の向かいに掛けてある鏡で二人の姿が見える。私は筆をおき、君たちの胸の鼓動に、私には君たちがいるということ、何も君たちを私から奪うことは出来ないということを生き生きと確信するのだ」と、姉妹への手紙で「三人所帯」の夢を語るのである。彼の夢にロッテが不安を覚えたのは当然だろう。「あなたには私よりカロリーネの方が大切に、あなたの幸福のためには私を必要としていないのではないのでしょうか」と、尋ねると、彼はこう答える。「…カロリーネは年齢的に私に近く、だから感情と思考の形が同じなのだ。彼女は私の感情を君よりも多く話にしてくれる。でも君が現在の君とは違う存在であることなど私は絶対にのぞんではない。カロリーネが君より勝

っているものを、君は私から受け取らねばならないのだ。君の魂は私の愛の中で伸びねばならないし、君は私の被造物でなければならず、君の花盛りは私の春のような愛の中で散らねばならないのだ。もっと後でわれわれが出会ったとしたら、君が私のために花咲くのを見るとこの美しい喜びは私には奪われたことだろう。」(15.Nov.1789)

この三角関係は『アグネス』ではあきらかに、ノルトハイム—アグネス—アマーリエの三角形に移されているが、小説内の描写だけではこの関係は何かよく分からないところがある。ノルトハイムと未亡人アマーリエは互いに理解しあい、愛しあっているようでありながら、なぜ結婚できないのか、アマーリエがアグネスに語る説明だけでは、直ちにその心情に了解を与えるのは難しい。彼女は「…不幸な境遇の中で私の人生、私の心の青春はしぼんでしまいました。私が救い出せたのはその残骸だけで、これは、若々しい感情の美しい優美さを保ってきた、ひとりの男性の完全な幸福をつくることは出来ないのです。…私があなたの幸福の邪魔にならないことを信じて下さい。」(1-268) といってアグネスの疑惑を解こうとする。しかし彼を愛していることは否定しないわけだから、彼女が「私自身にはノルトハイムとアマーリエへの関係は相変わらず謎だった」と思うのも至極当然で、このアマーリエのせりふは男性の側からの望みとして、上述のシラーの手紙と並べてみて初めて明瞭なものになる。小説の筋ではアマーリエの夫は生きていたことがわかって、彼女は再び夫と結ばれ、愛人のエミーレは修道院に入り、無事、全員が秩序の中に収まるが、この表層下にある本当の不可解さが小説内で解明されるのは不可能である。アグネスが「私は自分の気持ちの中の嫉妬などという些事にいつまでもこだわるのをはばかり、思い切ってもっと詳しく観察することができなかった」(1-358f) と語るように、カロリーネは小説では肝心な点には触れることができないのである。

1790年3月にシラーはロッセと結婚するが、彼はすぐに重病を患い、療養と保養に数年を過ごす。この間の彼らの生活費や保養の費用などもすべてポイルヴィッツが負担していたらしく、カロリーネにとって結婚とは自分だけでなく家族の生活を支えるものでもあったのである。

彼女は親友のリーの結婚相手フンボルトとも知的な交流をもった。フンボルトは、この頃、男女の心理や相補的性格と人間性の完成に必要な「気高い女性性」についての理論を練り上げていた。その「気高い女性性」の考察は、例えば、カロリーネ宛の手紙で「あなたとリーには美しく深い女性性の本質が全く独特の新しい形で現れている…」と述べているように、二人のカロリーネをモデルにして行われたものであった。

カロリーネはその後、マインツ選帝侯の補佐司祭でありエアフルト知事であるカール・テオドール・ダールベルクに「おそらくシラーによりももっと烈しく」恋したと、親友のリーは伝えている。カロリーネの離婚の意志はこれらの人物との交際によりますます強められることになり、その葛藤からの逃げ道を彼女は虚構の物語の構想に求めたらしい。彼女は1793年に病気のため、3ヶ月ほど温泉で保養に引きこもっていた時に、『アグネス』の計画と構想を練り始める。

さて、1794年3月にカロリーネは従兄のヴォルツォーゲンとスイスへ逃走するが、実はこの時カロリーネは妊娠していた。相手はシラーのもとで勉強し、彼の看病にもあたって姉妹と親しくなったリヴランド出身の騎兵大尉アドラースコルンだという。7月にポイルヴィッツとの離婚は認められ、9月にはスイスでヴォルツォーゲンと結婚、翌年1795年、同じくスイスで息子アードルフの洗礼が行われている。本当は彼は1年前に生まれていてどこかに預けられていたか、或いは第一子は亡くなってア

ードルフは第二子であったか、この頃のことに関しては不明な部分が多い。ただ彼女はヴォルツォーゲンを救い主として感謝していたという。⁸

その後ヴォルツォーゲンはシラーやゲーテの仲介で財政局参議官としてカール・アウグストに仕えた。ワイマールの彼らの家は社交の中心となり、カロリーネも精神的に安定した生活を送り、文筆活動を続けることもできた。

1793年に取りかかった『アグネス』が『ホーレン』に掲載を開始するのが1796年だから、カロリーネはまさに非常な人生の危機を『アグネス』を書くことで乗り越えようとしたのだろう。

(5)

彼女が残した膨大な量の文章や手紙などの遺稿の中に、晩年になって自分の人生を総括した文がある。そこで彼女は自分を分析して、内省的傾向、自然との合一による死への憧れ、哲学や知識への衝動、ゲーテ、シラー、カント、フィヒテなどの読書、偉大なものへの愛、想像世界への逃避、肉親への愛と犠牲精神などを列挙している。これらの要素はすべて、『アグネス』においても、例えばチャールズに会いに出かけた嵐の夜の神秘的な自然体験(1-385ff)、スイス旅行中の自然との関わり、アグネスの教育や読書体験、偉大な男性というノルトハイムの人物造形(彼は「私には神のように思えた言い表し難いほど気高い美しい人」(1-68)と神格化される)、両親のために自己を犠牲にしようとするアグネスの決意などに認めることが出来るだろう。

しかしここで特に注目したいのは、カロリーネがまず第一に自分の核となる強い自我の存在と、しかもそれを常に内へ内へと向かうものとして語ることからこの文を始めていることである。

「人生のあらゆる苦しみ、あらゆる不快にもかかわらず、内面生活に目を向けることが私を慰めてくれた。早くから私は自我を、内的力によって外界へと広がり、外界を自分に同化させ、しかし決して外界の中でなくなってしまうことのない核と見ていた。その力、展開、形、作用を感じる、観ること、自分に対して明らかにすることは、いつも私を内面へと引きこもらせ、存在の甘美な習慣への喜びを私のために保持してくれた。…」⁹

これはアグネスにもそのまま反映され、ヒロインは内面世界に沈潜してついには現実を離れて抽象的な世界へと入ってしまう。特にこれは物語の最終部分のスイスへの旅行中の叙述に顕著である。この旅ではあらゆる事物、周囲の自然も、目にする建物や絵画や美術品などもすべてがアグネスの情熱的な感情を清らかにし、調和をもたらすのに寄与するのだが、その中でノルトハイムへの愛までもが、「われわれの愛のイメージはいわば星々とひとつになる。…それは測り難い諸力の領域へとわれわれを連れていく。…われわれの心はあらためて愛する人をもとめ、ただ憧れだけを再び見出すのだ…」(2-376)と現実の対象を離れて抽象化された感情になってしまう。これが浄化であり、昇華であることと解されるのだが、アグネスは現実には、純潔な女性として貴族ノルトハイムと結婚するという実際的な目標に向かって行動しているのだから、ここには何か奇妙な飛躍がある。

トワイヨンが『アグネス』を「カロリーネはまさに彼女が内的に体験したことではなくて、彼女が願った目標、世界と生の理想を表現した」¹⁰と、評しているが、これはより正確には、カロリーネはある意味では自分の内的経験を表現しているのだが、男性の世界に適応することを理想としたがために、

その内的経験の本当の意味を捉えそこなっていたのだ、と言えるのではないだろうか。ワイマール古典主義の「偉大な」男性たちのあまりにも近くにすぎた彼女は、その美学的道徳的綱領を理想として自己をも、自己の表現をも形作らざるを得なかったのである。

ところで、カロリーネは第一部の最後に、気を失い熱を出している時に見た不思議な夢の話のアグネスに語らせている。(1-423ff)

アグネスがノルトハイムと花咲き乱れる美しい庭園に座っていると、美しい果物でいっぱいの籠を嘴で啜えた大きな色鮮やかな鳥が飛んで来る。二人が果物に手をのばすと、鳥はばたばたと飛び立って笑い、ノルトハイムに向かって叫ぶ「まだだよ、すぐにはまだだよ、だって彼女はお前を愛していないんだよ。」彼が立ち去ろうとするので、アグネスは足許に身を投げかけ、泣き、引きとめようとするが無駄である。彼を探すアグネスを野ばらの垣根の環が取り囲み妨害する。新しい環が次々にができて、恐ろしいほどの高さに伸びていく。すると環の真ん中にユーリウスが立っている。彼は騎士の甲冑をつけ、胸に大きな白い包帯をし、血の跡がある。アグネスが近づくと彼は包帯をひきちぎり、胸からは見たこともないような風変わりな色形の花が一輪生えてくる。「この花を私の胸からもぎ取ってくれば、君を解放してあげよう」と言うので、彼女は花を懸命に折り取ろうとするが出来ない。するとユーリウスはアグネスに微笑みかけ、剣で周囲の薔薇の垣根に触れると、それが開いて小道が現れる。すぐに茂みは消えて目の前にはノルトハイムの城が現れ、彼が近づいてくる。そこに例の鳥が飛んできてゆっくりと下り、地面に触れたとき、美しい少年に姿を変える。彼は最初鳥が渡すのを拒んだあの果物の入った皿をもっている。三人は駆け寄り、その子供を抱擁する。

作者は「この夢の人物たちの魔法が、私の心情に生き生きと働きかけた」と、アグネスの心に心理治療的効果を及ぼしたことを書き加えるが、どのような意味が含まれているのかについてはそれ以上何も述べない。

ギリ (Donatella Gigli) はこれは「禁じられたエロス願望が具体的に解説されて表現された解放的な契機、或いは、結婚の直前に行われるイニシエーションの儀式」と読めるとして、「愛の実現は最後には三人全員に与えられ、ノルトハイムの領地で起きた三角関係が夢の中で想像力と衝動性の要素によって補完され表現されたのだ」¹⁾と解している。この解釈も物語全体との関連を明らかにしているとは言えないのだが、ここでは何らかのアグネスのセクシュアリティが問題にされていること、ノルトハイム—アグネス—ユーリウスの三角形が清らかな「至福の三角形」では有り得ないことを暗示していることは明らかだろう。カロリーネは、明確な言葉では語れない何かを暗示するためにこの夢を考え出したのだろうか。それともこれも彼女の実体験なのだろうか。

カロリーネの表現についての詳しい検討は、さらに彼女のいくつかの短編と長編『コルデーリア』も含めておこなう必要があるだろう。

テキスト：

Agnes von Lilien Berlin Bei Johann Friedrich Unger 1798.

(Caroline von Wolzogen *Agnes von Lilien* 2 Teile in einem Band, Georg Olms Verlag, Hildesheim, Zürich, New York, 1988 を使用。作品からの引用は巻数と頁数を括弧内に記した。

- 1 星野純子：ラ・ロッシュ夫人の文学活動について——『シュテルンハイム嬢物語』を中心に——（『独仏文学』第21号、大阪府立大学独仏文学研究会 1987）9頁 参照。
- 2 リン・ハント著 西川長夫・平野千果子・天野知恵子 訳：フランス革命と家族ロマンス。平凡社 1999年
- 3 Todd Kontje: *Women, the Novel, and the German Nation 1771-1871, Domestic Fiction in the Fatherland*, Cambridge University Press, 1998.
- 4 Ulrike Prokop: *Die Illusion vom großen Paar, Bd. 1, Weibliche Lebensentwürfe im deutschen Bildungsbürgertum 1750-1770* Frankfurt a.M. 1991.s.79f.
- 5 星野純子：整備されていく〈女性性〉（田邊玲子編：ドイツ／女のエクリチュール、勁草書房、1994年）参照。
- 6 Donatella Gigli: *Die goldene Welt der Täuschung: Traum und Wirklichkeit in Karoline von Wolzogens Roman "Agnes von Lilien"* In: Hrsg. von Helga Gallas und Magdarene Heuser: *Untersuchungen zum Roman von Frauen um 1800*. Tübingen, 1990. S.171
- 7 カロリーネの生涯については特に、
Carmen Kahn-Wallerstein: *Die Frau im Schatten, Schillers Schwagerin Karoline von Wolzogen*, Francke Verlag, Bern und München, 1970.
Ursula Naumann: *Carolines Dreiecksgeschichten* In: *Caroline von Wolzogen 1763-1847*, hrsg.von Jochen Golz. Deutsche Schillergesellschaft, 1998. を参照。
- 8 Ursula Naumann: a.a.O.,S.18ff.
- 9 *Literarische Nachlaß der Frau Caroline von Wolzogen*, Leipzig,1848
(Caroline von Wolzogen *Literarischer Nachlaß*, 2 Bände in einem Band , Georg Olms Verlag, Hildesheim,Zürich,New York, 1990.S.110f.
- 10 Christiane Touaillon: *Der deutsche Frauenroman des 18. Jahrhunderts*. Faks.Dr.d.Ausg. D.Braunmüller Verl. Wien, Leipzig, 1919. Bern, Frankfurt a.M., Las Vegas, 1979.S.471.
- 11 Donatella Gigli:a.a.O.,S.168f.